

抗ウイルス樹脂を開発

動流
浸漬

工業浸流

配管、建材など拡販へ

各種プラスチックコーティング鋼管、建築部材の製造販売を行う流浸工業

業（社長＝大久保秀俊氏、本社・大阪府堺市美原区大保225）は、抗ウイルス性能を備えたコーティング用樹脂の開発に成功した。今後、配管部材や建材、医療器具など広範な分野で拡販を図る方針。

流浸工業は1963年、クナブザック・グリスハイム社（西ドイツ＝当時）から流動浸漬法を国内で初めて導入して以来、樹脂コーティングの普及に取り組んできた。流動浸漬法とは、流動浸漬用パウダーを入れた槽の下部に多孔質の隔壁を設け、ここに圧力をかけた空気を注入、圧力で隔壁上部の粉体を均一に浮かす。この流動層に加熱

2020 関西地区空調・冷熱 秋季特集

した基材を浸漬すること。ピンホールのない均一な塗膜を形成する技術。同法の適用で開発した「内外面PVCコーティング軽量鋼管」は、同社自社ブランド製品「リユールコートLight」ラ

イト）や栗本鐵工所の「クリモト臭突管」として販売され、高い採用実績を持つ。同鋼管は国土交通省のNETIS（国土交通省新技術情報提供システム）にも登録されている。

同社奈良工場（奈良市蘭生町7349）では流動浸漬用パウダーの製造やコンパウンドが可能で、市販の流動浸漬用パウダーやオリシナル製品の塩ビ樹脂（PVC樹脂）などに顧客の要望に

応じた発泡剤や抗菌剤を添加した樹脂開発も行っている。今回、新型コロナウイルス感染症拡大を背景に、抗ウイルス効果を持った樹脂の開発要請に基づき、

02）を行った結果、ネコカリシウイルスとインフルエンザウイルスに対して性能基準値をクリアできたもの。配管部材のほか、ドアハンドルや手すり、荷物用カート、福祉・医療

用具向けなど抗ウイルスのニーズが見込まれる分野で拡販を図る。流浸工業では、今後も抗ウイルス性製品の需要拡大を見込んでおり、量産体制で拡販を図るとともに、「引き続き改良を重ねながら、顧客のニーズにあった新しいコーティング用の樹脂開発にも注力していく」（大久保社長）方針だ。

同社は本社大阪工場、関東事業部（埼玉県熊谷市）、奈良工場の3拠点で流動浸漬加工を行って